

国立リハビリテーションセンター学院 リハビリテーション学科

同窓会会報 第 22 号



国立身体障害者リハビリテーションセンター学院
リハビリテーション体育学科

同窓会会報 第 22 号

もくじ

1 . 第 14 回 RS 同窓会報告	
(1) リハビリテーションスポーツセミナー -----	1
(2) 会員職場紹介・活動報告会	
「近況報告 東京都障害者総合スポーツセンターにて」	14 期生 横田 篤志-----9
「社会福祉法人 太陽の家での取り組み」	13 期生 久保田 崇之-----10
「職場紹介 ～日高コミュニケーションセンターについて～」	11 期生 五十嵐 正雄-----15
「活動報告 郡山市障害者スポーツセンター」	4 期生 二階堂 のり子-----16
「職場紹介 ～いわき市役所長寿介護課介護予防係～」	1 期生 岸本 恵美子-----19
(3) 卒業論文発表会 (15 期生) -----	20
(4) 定期総会 -----	22
2 . 会員近況報告-----	24
6 期生 竹村 亮子	
15 期生 秋山 太郎	
15 期生 井藤 知世	
15 期生 内藤 舞	
3 . 学院紹介	
(1) 16 期生紹介-----	27
(2) 17 期生紹介-----	28
4 . 会員研究報告	
11 期生 本田 春彦-----	29
5 期生 伊藤 澄雄-----	30
5 . 同窓会活動報告-----	32
第 28 回医療体育研究会 / 第 11 回日本アダプテッド体育・スポーツ学会 第 9 回合同大会 ワークショップ「障害のある人々のスポーツプログラム」	
* 編集後記 *	
* 表紙の写真 ; 第 28 回医療体育研究会 / 第 11 回日本アダプテッド体育・スポーツ学会合同大会にて 参加者にマイクを向ける齊藤会長 (撮影 6 期安江)	

1. 第 14 回 RS 同窓会報告

(1) リハビリテーションスポーツセミナー

平成 18 年度同窓会では、齊藤会長・木畑初代会長が中心となり平成 18 年度リハビリテーションスポーツ学科同窓会主催という形でリハビリテーションスポーツセミナーを行いました。

講義あり、実技ありのセミナーで、たくさんの会員が熱心に参加していました。以下にセミナーの主旨や目的、内容、結果、資料等を添付し、報告いたします。

・ **主旨**：今年度 OB 会の活動の一環として、リハビリテーションスポーツセミナーを開催します。このセミナーは OB 会として、RS のあり方を模索している手段の一つです。

・ **目的**：今年度は内側を対象にしたセミナーを行い、来年度以降、外側（関連の研究会や団体）に向けて、また内側と外側（関連の研究会や団体）をつないでいけるような活動を実施していく為の準備です。

・ **対象**：RSOB 会会員

・ プログラム内容

日 時：平成 18 年 3 月 3 日（土） 13:00～16:00

場 所：国立身体障害者リハビリテーションセンター内 体育館

内 容：13:00～13:10 セミナー挨拶（担当 齊藤）

1) セミナー開催について

内容 セミナーを行うにあたってのいきさつと本時のねらい

2) 講師の紹介

内容 講師の紹介

13:10～13:50 リハビリテーションスポーツゲーム集について（担当 木畑、齊藤）

1) ゲーム集作成のねらい（担当 齊藤）

ゲーム集を作成しているねらいの解説

2) ゲーム集開発の理論的背景（担当 木畑）

ゲームを開発する過程の理論的背景の解説

13:50～14:00 休憩

14:00～15:20 ゲーム集からの紹介および課題の検討（担当 木畑）

1) 14:00～14:30 ゲーム集からの紹介

内容 理論的背景に基づいて、ゲームを開発する過程の解説と実施。

題材 車いすティーベースボール

2) 14:30～15:20 設定課題の検討

内容 参加者に課題を提示し、課題に対してどのように解決を図るかを個々で考え、その解決方法について全員で検討する。

課題 脊髄損傷者、バスケットボール
(詳細は「 . セミナー資料参照」)

15:20～16:00 まとめと今後の課題(担当 齊藤)

内容 ポイントになることを整理し、大まかな今後の課題を提示し、
参加者と議論できる機会を設ける。

備考 終了後にセミナーに関してのアンケート調査を行う。

. ワークショップ実施後の結果(アンケート調査より)

1. セミナーを受けての感想

- ・RSの意義(考え方)を改めて考えることができる良い機会だった。
- ・実際にいろいろな人のアイデアを見せてもらえて、とても参考になった。
- ・ずっと講義や発表だと様々な人に話せないが、スポーツを行うことにより会話しやすかった様
に感じた。
- ・現場の中で無意識に行っていたことを、整理するきっかけになった。
- ・考え方について再確認することが出来た。目的を持ってしていることを人に伝える為に、分か
りやすく説明する必要があると思う。

2. リハビリテーションスポーツゲーム集について

- ・大変良いと思う。ペースがあれば、自分でアレンジも出来る。
- ・あることで可能性が広がる。自分にはない知識が得られ、実践し易い。
- ・ルールの確立したスポーツの効果には日々驚かされている。いろいろアイデアを共有すること
でRSとしての特性も持てよいと思う。
- ・いろいろモデルが入っているが、その考え方、意図しているものの活用など参考になる。広め
ていければ良いと思う。
- ・スポーツを行うだけでなく、リハビリテーションを具体的に実施するのに、評価などが作れて
良いと思う。
- ・体力値・心理などゲームの効果をデータとして残して、研究発表を平行して行っていけば、ゲ
ーム集としての信頼性が高まると思います。

3. 来年以降、セミナーを実施するにあたり、どのような形態を整えていけば良いか？

- ・今回のような体験型が望ましい。さらにそれを踏まえて、ディスカッションの場があると良い。
- ・実技などがあってよかった。今後もこのような形態が良いと思う。
- ・障害者スポーツ指導者協議会の研修会などを合わせて行うなど、ある程度対象者を絞った中で
開催してみてもどうか？
- ・分野別に話し合う・考え合う時間と設定すること。
- ・RSとしての考え方を統一する内容+現場における検討事例を全員で話し合えたらと思う。

4. 将来、外部に発信していけるようにしていく為の工夫について

- ・ RS の考え方を統一させ、OB 全員が症例を報告していく。
- ・ 身体障害者以外にも対応する種目などを取り入れていく。
- ・ 近い畑から耕していく（例 障害者スポーツセンターでの公開教室）。
- ・ OB 会に外部に人を呼び込むのも一つの方法と思うが、他の研究会などで発表し、ゲーム集の紹介をしていく。
- ・ 様々な対象者（CP、知的、高齢者、身体、精神）に合わせた種目・工夫するポイントなどを提案できるようにする。そして、全国に散らばっている RSOB の協力が必要だと思う。

・当日のセミナー風景



開会の挨拶



車いすティーベースボールの解説



車いすティーベースボールの体験



課題検討中（バスケットボール）



課題実践中（バスケットボール）



終わって一息！さあ飲むぞ。

・セミナー資料

平成18年度 リハビリテーション体育学科同窓会

リハビリテーションスポーツセミナー

「リハビリテーションスポーツゲームの開発にあたって」

国立別府重度障害者センター 木畑 聡

はじめにおことわり

グループ・個別？

グループでの対応の話が中心となる

プログラムのひとつとしてのゲーム

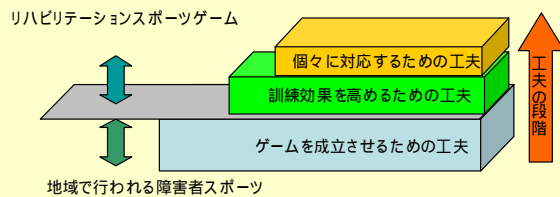
ゲームがリハビリテーションスポーツのすべてではないが心身両面においてスポーツの特徴が出やすく有効な手段であるだけに、このセミナーではリハビリテーションスポーツゲームの開発について理論づけで考えていきたい

リハビリテーションスポーツゲーム種目開発に関する3つのキーワード

ゲームを成立させるための工夫

リハビリテーション効果を高めるための工夫

個々に対応するための工夫



ゲームを成立させるための工夫

- グループ分け

ゲームのルール等で工夫できる範囲を超えていないか

- グループを構成するメンバーの機能を考慮

機能に応じてルールや使用する道具の工夫

- 興味を持って取り組める内容か

内容自体が興味を持って取り組めないと、ゲームを使った訓練効果はあがらない

リハビリテーション効果を高めるための工夫

- ねらいとする動きが引き出せているか

ねらいとする動きがゲームの中で自然と出るか

- ねらいとする運動負荷がかかっているか

対象者に対して、負荷が極端に強すぎたり低すぎたりしないか

個々に対応するための工夫

- グループ内の機能差や能力差に配慮がなされているか

機能が重度な対象者に負担がかかっていないか

機能が重度な対象者がチームに貢献できているか

機能が軽度な対象者にとって簡単すぎたり負荷が軽すぎないか

ウィルチェアーティーベースボールの紹介

国立別府重度障害者センターで、頸髄損傷者を対象に実施しています

従来から行われていたゲームの改良

従来から、当センターで訓練種目として実施されていた車椅子野球をベースに、

より重度な障害を持つ対象者まで実施可能(C5レベルまで想定)

リハビリテーションとしてより高い効果を望める

機能差や能力差による運動負荷や難易度の格差がより少ない

上記の3点を目的に、車椅子野球のルールとゲームに用いる道具の変更を行い、新たにウィルチェアーティーベースボールゲームを考案した。



車椅子野球(旧来)とウィルチェアーティーベースボールの比較

	車椅子野球 (旧来)	ウィルチェアーティーベースボール	
打撃の方法	ピッチャーが投げたボールをバッターが手で打ち、バッター自らが走る	ティー上に置かれたボールをバッターが手で打ち、前の打順のプレイヤーが走者となり走る	
守備の方法	守備のプレイヤーの機能に応じてアウトの方法が決まられており(車椅子に当たればアウト、ボールを拾い上げればアウト等)、その基準を満たせばアウト	基本的には、ボールが車椅子もしくは身体に触れたプレイヤーを中心に3人のプレイヤーがホームベースに対して真っ直ぐに整列できた時点でアウト	
得点	ホームベースを踏んだ時点で1点が入る	アウトの時点で走者が回ったベースの数が得点となる(1回の打撃で最大4点)	

目的別の工夫例

ゲームを成立させるための工夫

より重度な対象者まで実施可能となる工夫(C5レベルを想定)

このレベルでは、機能的な問題から、上肢を動かせる範囲が少ない、

具体的な問題点

飛んでくるボールに対し打てる範囲が少ない
打つ際にバランスを保つため車椅子のブレーキをかける
床上のボールに触ったり拾い上げることが困難である場合が多い

の解決 → ティーを用いた

の解決 → 打者と走者を分けた

の解決 → ボールが車椅子もしくは身体に触れればアウトとした

目的別の工夫例

リハビリテーションとして効果を高める工夫

短時間で効率よく運動負荷をかける工夫

具体的な問題点

ピッチャーのコントロールによって、ゲームが進行しない場合がある
バスケットボール等と比較して時間の割には運動量が少ない

の解決 → ティーを用いた

ねらいたい場所に好きなタイミングで打つことが可能となり、
ゲームの進行が早くなる

の解決 → 3人ならびのアウト方式とした

打撃のたびに守備全員が動かなければならず、運動量が増大する

目的別の工夫例

個々に対応するための工夫

機能差や能力差による運動負荷や難易度の格差を少なくする工夫

グループ内での機能差や訓練の習熟状況による能力差

具体的な問題点

対象者間でプレイの難易度に格差が生じてくる。
対象者間で運動負荷に格差が生じてくる

の解決 → ボールを拾える機能を持つ対象者はボールを拾い上げ
ひざに置くことをアウトの条件とする

の解決 → ボールに触れた守備のプレイヤーは、次の打者がボールを打つまで、ボールに触れた位置から動いてはならない

注: 動きのよいプレイヤーがボールに触れる傾向にあることから、このルールの適用により、攻撃側は動きのよいプレイヤーを遠ざけるために好きなところに動かすことになり、結果として動きのよいプレイヤーの活動量が増えることにつながる。

目的別の工夫例

個々に対応するための工夫

最重度の対象者を積極的にプレイに関わらせる工夫

車椅子自操がやっとの対象者の場合、チームへの貢献度が低くなりゲームへの参加意欲も低下しがちとなる。

具体的な問題点

3人ならびの守備の適用では、走力の低いプレイヤーは、チームの負担となってしまふと同時に運動負荷も多くなりがちである。

の解決 → チーム内でも障害が重度である対象者については、そのプレイヤーがボールに触れた時点でアウトが成立するようにする。また、他のプレイヤーがボールに触り、障害が重度である対象者にタッチした時点でアウトが成立するようにする。

注：このルールを適用することで、より重度な対象者が存在することがチームには有利な要素となる。

考えてみましょう

種目：車いすバスケットボール型（パスとシュートがプレイに含まれる）

* リハビリテーションの一環として行われる種目です

想定する対象者

【脊髄損傷者 6名のグループ】

2名

車いすバスケットボールに慣れており、ボール運びや パス・シュートができる

4名

車いすの自操は問題のないレベル、ボールのパスくらいは行ったことがある。

バスケットボール形式のゲームは実施したことはあるが、自分の車いす操作で精一杯の状況

Qこのグループで通常の車いすバスケットボールを行うとどんな状況が起きるだろうか

書き出してみましょう

Qこの状況で車いすバスケットボールのルールで行うことは、リハビリテーション種目として問題はないのでしょうか

どのような問題が起きるか書き出してみましょう

Q問題点について、ルールや道具を工夫することで解決が可能でしょうか。

- 今回は、ルールの変更だけで対応してみましょう。

パスがつかながるようなゲームにする

シュートが成功しやすいゲームにする

* 可能な限り、わかりやすいルール変更を抑えてみましょう

参考資料

身体再適応評価表について

各種ゲームについては、支援する側も実施する側もなんとなく楽しく実施できてよかったで終わらせる傾向にある。しかしながら、対象者も積極的に取り組める訓練内容だけに、無意識のうちに普段の生活場面からは想定できないような動きや他者とのやりとりが見られることが多く、なんらかの形で、支援者以外にもその変化を伝えていきたいと考えている。今回、各種ゲームの中で評価が可能な身体の使い方について評価方法試案（**身体再適応評価表**）を作成した。

身体再適応評価表

	項 目	目標	結果
素いすの扱い			
	自力で移動ができる		
	静止している物体に対して適切な対応ができる		
	周囲の動いている物体に対して適切な対応ができる		
投げる			
	投げることができる		
	離れたところ（静止した的）に投げるができる		
	離れたところ（動いている的）に投げるができる		
捕る			
	身体（捕球具を含む）を使って動いている物体を捕ることができる		
	手や道具を使って動いている物体を捕ることができる		
	自分が動いている状態で手や道具を使って動いている物体を捕ることができる		
打つ			
	身体（捕球具を含む）を使って静止している物体を打つことができる		
	手や道具を使って静止している物体を打つことができる		
	手や道具を使って静止している物体を離れたところに打つことができる		
	手や道具を使って動いている物体を離れたところに打つことができる		
	合 計		

身体再適応評価表

身体障害者の場合、受傷により身体機能が大きく変わり今までに獲得した身体図式が使えなくなってしまうため、スポーツ訓練ではスポーツに含まれる様々な動きを活用して「**身体図式の再構築**」を図っている。身体再適応評価は、身体図式の再構築の状況の評価するものであり、スポーツ活動で用いる動きを項目ごとに分類し、残存機能に応じて目標を設定し、各種ゲームを行う中で評価を行うものである。

〔基本的な考え方〕

- 各ケースごとの身体の再適応に関して、目標に対する進捗状況を把握するための評価（他ケースとの比較ではない）
- 各ケースごとに身体機能等を考慮して、目標設定を行う。
- 各種目ごとに、各項目の評価基準を設ける。
- 半年ごとに評価を実施し、目標に対する進捗状況を把握する。

参考資料

各項目ごとに動きの難易度をおおよそ2段階に分類する。
難易度1の動きができない場合は、0ポイントと判断し、各項目ごとにポイント
を0 1 2 の段階に分ける。

手や道具を使って静止している物体を離れたところに打つことができる

ポイント	ポイントの基準	難易度別動きの例	詳細
0	いずれの動きもほとんどできないか、偶然できる		
1	難易度1の動きが、5割以上の確立で可能	ゴロ卓球のサーブ エアホッケーのサーブ	以下参考
2	難易度2の動きが、5割以上の確立で可能	ウルチェアアーチーベースボールのバッティング	以下参考

難易度1レベルの詳細
ゴロ卓球（サーブ）

できる基準	傾向	参考となる表情・行動	うまくいかなかった場合の兆候
相手のフェイクポイントにねらってサーブすること	サービスエース サービスエースがとれなくても、ねらいどおりにサーブできた	「よし、よっしゃ、笑みをうかべる 特に無表情」	「あー、」（そー、残念な表情）
相手コートにその後のラリーが流ば、次にサーブを入れることができる	相手が打てる位地にボールを打てた	特に無表情	「わい！」「ごめん、下を向く 照れ笑いをする

難易度2レベルの詳細
素いすアーチーベースボール（バッティング）

できる基準	傾向	参考となる表情・行動	うまくいかなかった場合の兆候
ティー上のボールを、守備のいないところにねらって打つことができる	ヒットが打てた ヒットにならずでも、ねらいどおりに打てていた	「よし、よっしゃ、サイズ（バッティング、周囲から）笑みをうかべる 特に無表情」	「あー、」（そー、残念な表情）
次の打者が打ちやすいように適切な位置に打つことができる	動かしにくい守備のプレイヤーを適切な位置に動かさせた	特に無表情 「ウー、」などの、だよ、サイズ（バッティング、周囲から）」	「しまった、照れ笑いをする

身体再適応評価表とリハビリテーションスポーツゲーム集

身体再適応評価表で評価する項目は、スポーツ活動でよく用いられる動きである。したがって、指導者が、ゲームを実施する中で、評価ができるという利点がある。評価内容も簡便化しているため、その場で個別に用紙に書き込みながら評価をしながら、指導者の記憶で評価することができる。
リハビリテーションスポーツゲーム集には、今後、各種目ごとにその種目のどの動きが身体再適応評価表の評価項目に該当するのかが記載をしていくことで、リハビリテーションスポーツゲーム集の各種ゲームがリハビリテーションの手段として有効に活用でき、かつ評価も可能であることをアピールしていればと考えている。

（２）会員職場紹介・近況報告会

例年通り、会員による職場紹介、近況報告会が同窓会二日目に行われました。会員および学院生が参加し、活発な意見交換が行われました。

「近況報告 東京都障害者総合スポーツセンターにて」

14期生 横田 篤志

勤務先：東京都障害者総合スポーツセンター（東京都障害者スポーツ協会）

職名：スポーツ支援室 契約スポーツスタッフ

対象者：身体・知的・精神障害児者

勤務内容：各スポーツ施設での運動指導や安全管理を含めた場のコーディネート
各種教室運営・指導

東京都障害者総合スポーツセンターは、3障害すべての障害をお持ちの方が利用される上、一日の利用者数が何百人であり、また、利用目的も昔の「スポーツを行ってみたい」という利用者の方より、「健康の維持・増進」「リハビリテーションの継続」という目的の利用者の方が大変増えてきているように思えます。その背景としては平成18年度の診療報酬改定により入院期間が短縮されたことが一つの要因として考えられると思います。

本センターでは脳血管障害の利用者数が大変多いです。私が勤務してからの脳血管障害の新規利用者の多くは拘縮予防の為に片麻痺体操（ストレッチング）や起居動作ですら正しい動作が習得できていないにもかかわらず退院を迫られ、センターをリハビリテーションの継続場所として訪れる方が多いように思えます。今まで病院で獲得できていた必須体力の獲得も病院から外の施設へと委ねられてくる時代になってきているように思えます。本当の社会（復職や社会資源を活用して余暇を楽しむ）へのリハビリテーションの中で病院と社会の中間に立つ、橋渡しとなれる施設が重要になってきたように思えます。

それと共に障害を持つてからの生活習慣病に対するリスクは健常者以上に高いという報告は多くあります。介護予防運動の普及が叫ばれている昨今、障害者の方に対する介護予防運動の普及も今後の課題として重要であると思います。本センターでもそのような背景を踏まえて「簡単リハスポーツ」という教室を実施しています。以上のような背景からも今後、病院から退院後の地域での指導・サポートの要員としてリハビリテーション体育を学んだ人間のマンパワーが必要になってくるように思えます。決して一人では変えられない社会ですので諸先輩方・在校生と協力してよりよい体系を整えていければと思っています。今後も何かとよろしくお願いします。

* 質疑応答では会員から障害者スポーツセンターの現状などについて質問があり、活発な意見交換が行われました。なお、発表内容については会報誌前号（21号）に掲載させていただいており、今回は一部のみの掲載とさせていただきます。

1) 法人の特徴

社会福祉法人「太陽の家」は1965年（S.40）「世に身心（しんしん）障がい者（児）はあっても、仕事に障害はありえない。」「保護より機会を」という理念の下、整形外科医である中村裕先生によって大分県別府市に創設された。40年が経過した現在では、様々な障がいを持たれた方を対象に、就労、生活の視点から支援を行っている。

就労支援としては、ADLの自立や社会力（社会性、職業能力など）の度合いに応じてサポートを行っている。主な内容としては、肢体不自由者更生施設「自立生活トレーニングセンターゆたか」でのリハ訓練、共同出資会社や協力企業の連携による入所・通所授産施設での訓練就労、身体障害者福祉工場による雇用就労などである。

生活支援としては、身体障害者療護施設「ゆうわ」、身体障害者福祉ホーム「大神（おおが）ハイツ」などの生活施設、ショートステイ事業、ホームヘルプ、ケアプラン提供などの居宅支援などである（図1を参照のこと）。

また、パラリンピック、フェスピック大会（極東・南太平洋身体障害者スポーツ大会）、大分国際車いすマラソン大会など、障がいのある方々のスポーツへの参加の啓蒙、促進を図ると共に、「福祉」としてだけではなく、「スポーツ」としての障害者スポーツの振興に尽力をしている。

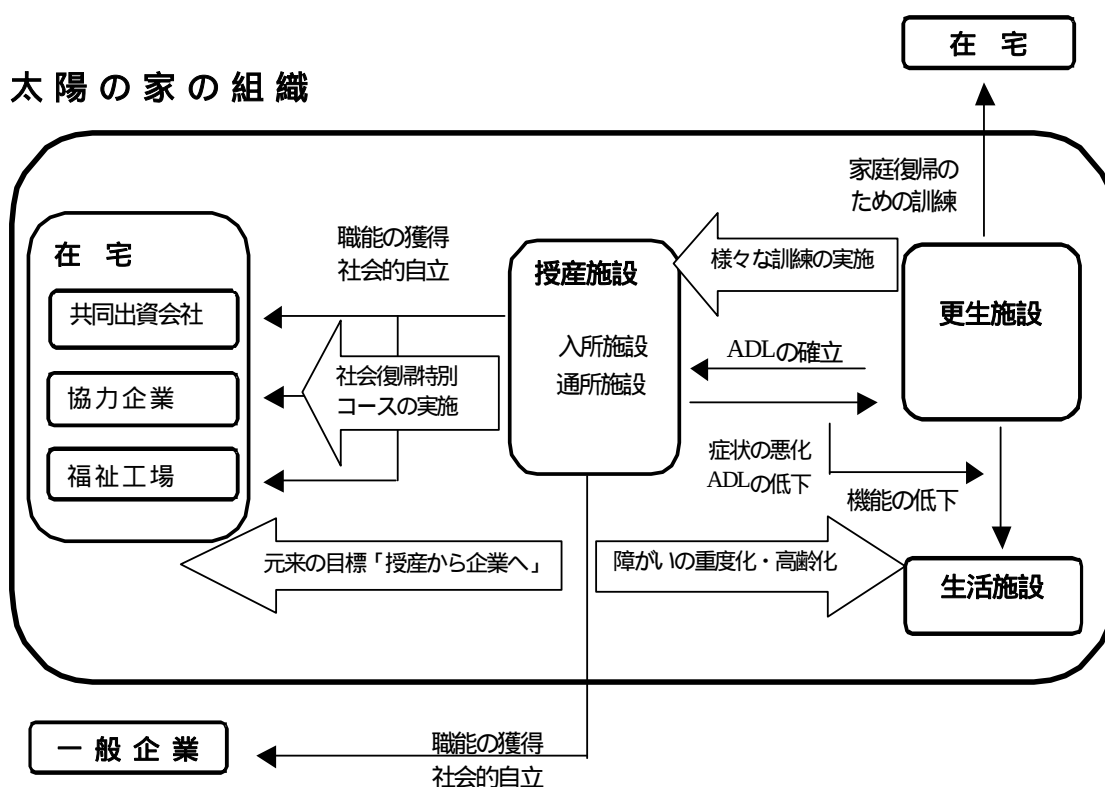


図1. 太陽の家の使命とその役割

2) スポーツの役割

目標

障がい者の就労・生活への支援をし、個々が地域社会において自立し、豊かな生活を送ることの援助をすることが太陽の家の大きな役割である。その中でスポーツが目標とすることは、「スポーツそれ自体を楽しむこと」「スポーツを手段とすること」という視点である。

「スポーツそれ自体を楽しむこと」とは、スポーツを遊びや競技としてとらえ行うことである。障がいにより、スポーツが好きでも関わる機会が少なかったり、スポーツ自体を知らない方に対し、ニーズに沿ったスポーツを紹介・実践することで、運動を生活の中に定着させることを目標として行っている。

「スポーツを手段とすること」とは、スポーツを通じて下記の『 目的の概要 』に挙げられるような項目に対し、アプローチするためにスポーツを行うことである。目的の概要とは、裏を返せば障害を持つことによって低下が懸念される内容でもある。スポーツを手段と考え、自ら目的を持ってスポーツに取り組んでいただけるようにしていくことも目標となっている。

上記の2つのことを達成させるために、スポーツを通して、余暇活動の充実を図り、それぞれに合ったスポーツの形を獲得していけるように支援をしている。また、1人1人の障害を、指導者がきちんと把握した上での指導を行い、最終的には、自己の障害をしっかりと認識し、管理してもらえよう指導を行っている。

目的

「授産施設から企業へ」という太陽の家の使命を果たす為、スポーツを行うことによる機能向上、健康の維持増進を図っている。加えて、スポーツを通じて社会性を高め、自立を促し、社会参加の手段として利用している。また、障害を持つことによって低下しがちな、活動量（身体面・精神面・行動面）の確保という視点でもスポーツを行っている。

近年、授産従業員の中でも施設が最後の棲家と考える人が増えていく傾向がみられ、生活と就労の場が同じという変化のない環境の中、QOLの向上という観点からスポーツを導入することも重要な目的となっている。

目的の概要

機能・形態の維持、改善 可動域や体脂肪率などの維持、改善。

体力の向上 瞬発力・持久力・巧緻性などを向上。

運動技能の獲得 協調が取れ、効率的な身体の動きの養成。

社会性の育成、向上 協調性や行動の規範の育成、社会適応能力の向上。

精神面の賦活・高揚 自身の可能性や限界に対する挑戦、自己を知る機会、達成感、爽快感、ストレスの解消など。

3) スポーツのあり方・内容

あり方

創設当時は障害者スポーツ（車いすマラソン・車いすバスケットボールなど）をリハビリテーションスポーツとして取り入れ、心身機能・運動技能の向上を図っていた。そして、そこから生涯スポーツにつながり、一部が競技スポーツとして、国内外のスポーツ大会に参加することで社会との橋渡しをしてきた。

現在は、創設から 40 年という歴史を重ねる中で、障害の重度化・高齢化が進み、重度の障がい者でも楽しむことのできるスポーツの発掘・推進を行い、余暇の充実を図ることに重点をおいている。

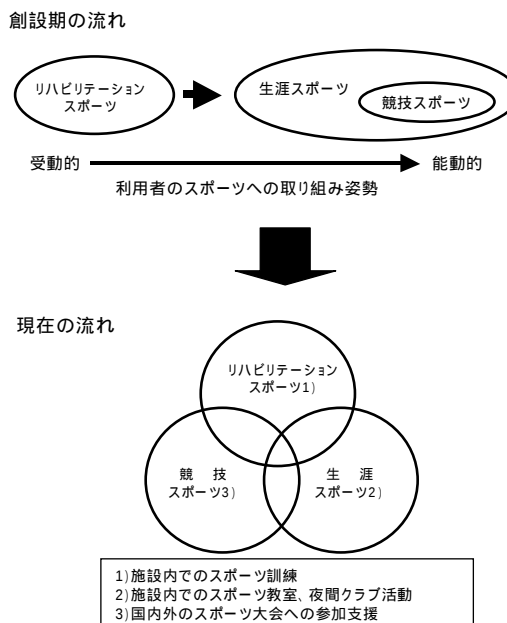


図 2. 創設期から現在へのスポーツのあり方の変容

創設当時：リハビリテーションスポーツから生涯スポーツへという流れが主流

現在：リハビリテーションスポーツ、生涯スポーツ、競技スポーツの 3 つの入口

（図 2 を参照のこと）

内容

太陽の家では、利用者・従業員の健康管理を図るため健康推進課を設けている。健康推進課では、スポーツ訓練、夜間のスポーツ教室の実施、トレーニング室の開放、プール（夏期のみ）を利用するなどして機能維持・向上、健康管理などにスポーツを取り入れている。また、クラブ活動を奨励する為、遠征費などの補助を行っており、障がいのある方の自立とスポーツは切り離すことのできないものとして位置づけている。

2004 年 7 月から社会復帰特別コースを設け、近年低迷している企業への採用を果たすためのプログラムが生まれ、スポーツもその中の一つとして取り入れられている。また、2006 年 7 月から「自立生活トレーニングセンターゆたか（肢体不自由者更生施設）」の利用者を対象に、理学療法、作業療法と共に RS（リハビリテーションスポーツ）訓練としてのプログラムが始まっている。RS 訓練では、楽しみや自分の変化を通じて、1 人 1 人が主体的に身体を動かすことができるようサポートを行っている。

4) スポーツの種目

障害のレベルにより、既存の種目に参加できる、種目参加のために工夫が必要、参加が困難な種目がある。現在は、既存の種目をベースにした種目と対象に合わせて工夫を加えた種目の 2 つに大別しながら、対象者の意向に応じている（表 2 を参照のこと）。

下記に種目の一部概要と取り組み風景を紹介する。

表 2. 取り組まれている種目一覧

既存の種目	対象者に合わせた種目
ローリングバレーボール	室内野球
車いすバスケットボール	風船バレーボール
ツインバスケットボール	旗門球
CPサッカー	ハンドサル
車いすテニス	ボッチャボウリング
陸上競技	ビーチボールサッカー
カヌー	バウンドハンドボール
卓球バレー	
ボッチャ	
フライングディスク	

Rehabilitation Sport

卓球バレー

概要：6人制のゴロ卓球、鉛の入ったピンポン球を木の板（30cm程度）のラケットで打ち合う。

対象：老若男女

ボッチャ

概要：的球に青と赤の手球を投げ合って、どちらが近づけられるかを競う。

対象：老若男女

特記：パラリンピックの正式種目



ハンドサル

概要：床に座り、手を使って行うサッカー。立位や車いすで、動きに制限がある人も安全に動き回ることができる。

対象：重度障がい者

旗門球

概要：ボッチャのボールを用いて、手で転がして行うゲートボール。

対象：重度障がい者

5) スポーツの効果の一例

障害の重度・重複化、障害者自立支援法の施行により、障がいを持たれた方の生活・就労をはじめとする様々な局面が、大きく変容している。太陽の家もその追風を受け、施設全体のあり方の見直し、今後の方向性を模索している。その中で、スポーツ・レクリエーションを導入することの意義やその存在も見直し、新たな局面を生み出す時期にきている。

太陽の家では、個々人が地域社会において自律し、豊かな生活を送ることを援助していく過程で、スポーツを導入し、「2 スポーツの役割 目標」を実践していく指導している。現時点で、客観性の高い評価は不十分だが、実践における指導エピソードを紹介することで、スポーツの持つ効果を示したいと思う。

事例紹介

出来事

利用者からの「サッカーをやりたい」という要求に対して、2005 年の冬、スポーツ訓練でハンドサルを行う。以前より指導・実践をしていく中で、車いす操作がおぼつかない、立位姿勢での保持・移動が不安定で転倒の危険性が高いなどの人達に対するアプローチを模索していた。そこで、サッカーの“脚でボールを扱う”と言う既成概念を壊し、“床に座って、手でボールを扱う”という要素を取り入れ、安全で、皆が楽しめる工夫を導入した。

メタ意味

ハンドサルを行う中で、“ゴールを決め、ガッツポーズする”、“声を張り上げる”、“涙を浮かべながら、悔しがる”など一喜一憂する感情表現が見られた。これはサッカーが出来ないという固定観念により、束縛されていた身体が解放され、拡がりを持ち持ったことが理由である。また、勝負をするという要素が、感情を剥き出しにし、勝つという目標に向けてチームで協議し合う行為を引き出すことにつながっている。今回、利用者の要求から、既存のスポーツに工夫を加えた。そのことが、利用者の情動へ働きかけ、モチベーションを高めることになり、今までに経験のしたことのない身体の可能性を知る機会になっていると考えられる。

* 会員より、障がいを持つ子どもを対象にする際の勝負へのこだわりや集団種目におけるグルーピングの問題についての質問があり、会員間で活発に議論が交わされました。また、障がいの重度化や病院の入院期間が短縮していることからリハビリテーションの必要性がある方が増えているのではないかと指摘があり、さらに、必要に応じて個別プログラム、集団プログラムを取り入れていくことが必要ではないかとの意見がありました。久保田さんからも実際に片麻痺の方が増えており、国立リハで行っているような訓練を取り入れるようになっていることや集団でのスポーツを取り入れることの困難さなどが報告されました。

「職場紹介 ～日高コミュニティ・ケア・アクセス・センター（現：日高在宅療養支援センター）～」

11 期生 五十嵐 正雄

日高病院の関連会社である（株）エムダブルエス日高。社内で介護保険事業を展開する在宅事業部に、ショートステイやデイサービスなど6つの事業所と学童クラブ有する複合型施設「日高在宅療養支援センター」が新たに加わる。



訪問入浴

自宅に移動浴槽を設置し、入浴を実施する。1人の利用者様に対してナースを含む3人以上のスタッフが付く手厚い介護が特徴。

訪問介護

自宅に出向き、生活援助や身体介護サービスを行なう

訪問看護

自宅に出向き医療的介護を実施。日高はターミナルケアとリハビリに重点を置いている。

居宅介護支援

日高病院を退院した利用者様を中心にケアマネージメントを行う

ショートステイ

全室個室 37 床 ユニット型の大型施設。病院退院後の在宅ケアに不安を抱く利用者様は多くニーズは高い。病院の特徴から透析患者様も多数利用している。

デイサービス

五十嵐が所属している事業所。40 人対応の通常規模施設。病院と連携しているので重度と軽度の両極端な利用者様が多いことが特徴。平行棒や滑車、肋木、自転車エルゴメーターを使用した自主トレメニューや、病院より不定期に来所するセラピストによるリハビリなどの機能訓練を実施。

学童クラブ

広く地域に展開しているのではなく、日高グループの職員のための施設。病院に病児託児所と合わせて、職場環境の充実に貢献している。



日高病院は急性期型病院であり、患者様の入退院のサイクルが早い。患者様や家族から退院についての

不安や不満を多く耳にする。病院の近所に、同じグループが運営しているショートステイやデイサービスなどの介護保険施設があることは、患者様や家族の不安を和らげる重要な役割を果たすと思う。自分はデイサービス所属だが、少しでも利用者様に満足していただき、地域に貢献できる施設にしていきたいことを目標としている。



* 介護老人保健施設にて実習した学院生の方から、介護老人保健施設とセンターの違いについて質問があり、五十嵐さんより「センターは子どもから大人まで幅広く地域を包括している」との回答がありました。

「活動報告 郡山市障害者スポーツセンター」

4期生 二階堂 のり子

今年度、下記センターにおいて外部講師として活動を行いました。

活動場所：郡山市障害者福祉センター

担当：障害者デイサービス事業
健康運動教室 外部講師

対象者：市内在住の成人肢体不自由者



センターの業務内容

- ・ 障害者の相談及び機能訓練
- ・ 障害者の教養・文化活動及びレクリエーション活動の支援
- ・ 身体障害者に対するデイサービス事業の実施
- ・ 障害者福祉に関するボランティアの養成

担当事業の位置づけ

平成 18 年 4 月～9 月 障害者デイサービス事業
平成 18 年 10 月～2 月 経過デイサービス事業
平成 19 年 4 月～ 地域活動支援事業

平成 18 年 6 月より 19 年 2 月までの間に計 15 回、健康運動教室の指導を行った。



参加者

人数 : 13 名 (男性 8 名、女性 5 名)

障害名 : 脳血管障害による片麻痺 脊髄小脳変性症 パーキンソン病 筋ジストロフィー 脳性麻痺 股関節障害 など

病院や地域のデイサービスに参加されている方も多いが、『体を動かしたい』『楽しく活動したい』という要望を持たれてこの教室に参加されている。個別の機能訓練よりは、集団で一緒に何かをしたいという要望が事前の聞き取りで多く聞かれた。

指導内容

回数が少ないため、この教室だけで運動の効果を求めることはできない。その為、自宅に戻って行えるようなストレッチや筋トレの指導、また地域のスポーツ・レクリエーション活動につながるような内容の種目を取り入れながら、1 回 90 分の教室を 15 回行った。

行った種目 ; ユニホック、ティーボール、アキュラシー、ポッチャ、リズム運動、ディスクゴルフ など

*Rehabilitation
Sport*

ボランティアの参加

この教室には常に4～6名の地域のボランティアが参加し、一緒に活動または介助などの補助にあたっている。障害者指導員の資格を持つ方はじめ経験もある方々で、個人の障害の特徴や留意点を伝え、それに従って安全面に配慮して活動されている。指導者としては手が足りない部分を補って頂いており、非常に助けられている。

来年度の課題

来年度も継続してこちらの教室を担当することになった。今後、参加者の人数が現在より増加することも想定し、そうした場合の指導の展開や内容について、参加者の希望も踏まえたいと考えていかなければならないと思う。また、センターでの指導のみではなく、市内のスポーツ・レクリエーションサークルなどについても把握し、希望があれば参加者やその担当ワーカーに紹介ができるよう、地域の活動状況などについても情報を収集したいと思う。

* 参加者の方には比較的若い方も多く、いつも介護者と二人で過ごすことにストレスを感じているという方もいて、こうした活動が他者との交流の機会となりストレスが解消されているのではないかというエピソードもありました。その他、早くに病院を退院しなければならなかった方などの対応として、活動やRSのニーズがあるのではないかと意見がありました。

「職場紹介～いわき市役所長寿介護課介護予防係～」

1 期生 岸本 恵美子

勤務先 いわき市役所 長寿介護課介護予防係

職 名 嘱託体育指導員（1 年契約—19 年度継続予定）

担当事業

1 介護予防事業：特定高齢者施策「運動器の機能向上事業」

目 的 運動器の機能向上を通じた生活機能の改善

対 象 者

介護予防ケアマネジメントにおいて、地域包括支援センターにより作成された介護予防ケアプランに「運動器の機能向上」が必要と位置づけられた虚弱高齢者

定 員 20 名

実施方法

二次アセスメント 医学的側面に関する評価、体力測定など

実施計画の作成支援 目標の設定、実施計画、モニタリング

事業への参加 運動プログラムの実施、自宅や地域で運動を実施する方法を考える時間を設ける

事後アセスメント 医学的側面に関する評価、体力測定、健康関連 QOL 測定

地域包括支援センターへの報告

開催頻度 週 1 回（90 分）の 3 ヶ月プログラム（計 12 回）

開催場所

総合保健福祉センター健康運動室（和室、フローリングにトレーニング機器などあり）

小名浜老人憩いの家（和室） 勿来老人福祉センター（和室）

担当職種と役割

看護師など：問診およびリスク評価など

運動指導員など：運動指導および、アセスメントの結果に基づく個別計画の作成

理学療法士：痛みの評価

現状や課題

7 ヶ所の地域包括支援センターより 1 次アセスメント受けた対象者が 7 月より教室参加予定であったが、おらず開催延期となり、9 月から対象者 3 名（80 代男性 2 名、60 代女性 1 名）で始まった。現在 6 コース終了し、終了者 20 名である。

課題としては、事業内容の理解、さまざまな対象者（要介護認定取り下げや未申請者、本来の特定高齢者など）、実施計画の作成（目標を自分で書くことは、困難—視力・意欲の問題）、自立に向けた支援（生活全体の向上など）、各職種の連携および役割分担などがあげられる。

* 質疑応答では、特定高齢者に関する事業にかかわっている会員から、同じような経験があったことなどの意見が寄せられました。なお、発表内容については会報誌前号（21 号）に掲載させていただいており、今回は一部のみ掲載とさせていただきました。

(3) 卒業論文発表会 15 期生

高齢者の健康・運動に対する国の取り組みの現状と今後の課題

RS 学科 15 期 1 番 秋山太郎

【目的】

2000 年から向こう 10 年間、健康日本 21 がスタートし、健康寿命を延ばすことを目的とした具体的な目標が設定された。本研究では高齢者の健康づくり事業の実施状況を把握し、問題を明確にすることを目的とした。

【方法】

厚生労働省や自治体の公開している、高齢者の健康や運動に関する統計調査、報告書などを中心に文献研究をおこなった。

【結果】

「健康日本 21」における高齢者の身体活動・運動に対する調査の結果、高齢者の身体活動に関わる取り組みは効果を上げることができていないということ 高齢者に対する健康日本 21 の普及啓発活動は効果を上げることができていないということ 健康に対する意識は高い横浜市高齢者の大多数が運動・スポーツを実施していないということ いくつかの団体において指導者の育成には力が注がれているということがわかった。

【考察】

身体活動・運動に対する中間実績値が低下を示しているのは、何らかの原因があるはずであり、今後、明らかにされなければならない。その理由の一つとして、運動習慣のない高齢者には、教室やプログラムなどの情報は、伝わっていないという可能性が考えられる。また行政が直接関与できる部分が限定的である人々の意識に働きかけることができるのは、現場の指導者である。指導者の働きかけが、健康への意識を行動につなげさせるための重要な役割を担っているといえるだろう。そのためには、指導者同士が情報を共有し、協力体制を築き、健康日本 21 の最終的な目標である「健康寿命の延伸及び生活の質の向上」を実現させていく必要があると考えられる。

【提案】

運動指導の現場で直接、高齢者と接する機会の多い指導者は、各項目における目標値の達成、高齢者に対する情報の提供、国民意識への働きかけなど、多くの場面において有用であるといえる。健康増進法制定後、国民の義務となった健康の維持・増進を図るための環境の整備は国の義務である。健康日本 21 を推進していくためには、指導者のための国家資格も必要なのではないだろうか。

車椅子ツインバスケットボールにおける円内プレーヤーの車椅子セッティングの一考察

RS 学科 15 期 2 番 井藤知世

【目的】

車椅子ツインバスケットボール(以下ツインバスケットという)の円内プレーヤーにおける、バスケットボール用車椅子(以下バスケット用車椅子という)について、セッティングの際に重要となる項目を明らかにする。

【方法】

経験者群(ツインバスケット歴 10 年以上)6 名と初心者群(同 5 年未満)2 名のバスケット用車椅子のセッティングに関する項目の計測と問診を行った。項目は、バックシート、座面、体幹ベルトに関すること、問診は身長、体重、年齢、バスケットボール歴であった。

【結果】

後座高、背座角、体幹ベルトの位置に有意差が認められた。経験者群は体幹ベルトの位置が身長に対して高く、背座角を直角に近い状態で後座高を高くする傾向にあった。反対に初心者群は、体幹ベルトの位置を身長に対して低い位置に使用し、背座角を鋭角にして後座高を低くする傾向にあった。

【考察】

経験者群は、高さを出すことに伴う不安定さをバックシートの後傾や体幹ベルトの位置を高くすることで解消し、シュートを有利にするだけでなく、後方へのディフェンスを可能にしていると考えられた。一方初心者群は、後座高を低めにするすることで体幹の安定性を向上させ、駆動力を発揮しやすくしており、さらに経験者群に比べて前傾姿勢となっているため、停止した状態から車椅子をこぎ出しやすくしていると考えられた。

【まとめ】

本研究での結果をまとめは以下のとおりである。

経験者群は、後座高を高くすることでシュートやディフェンスの幅を広げているが、バックシートが後に倒れていることにより、車椅子操作技術や筋力が求められる。

初心者群は、後座高を低めにすることで安定性を確保し、前進初期における駆動力が発揮しやすい。しかし、円背姿勢になりやすいため、上肢の動きが制限される。

質問紙法による脊髄損傷者の生活習慣病について～健康管理とその介入について～

RS 学科 15 期 3 番 田中 亜美

【目的】

本研究は、日常生活での運動の実施が、脊髄損傷者の生活習慣病、二次障害および生活スタイルに及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象者は「脊髄損傷者の方の健康状態調査」によるアンケート調査をした上で、運動状況による項目を回答した脊髄損傷者 782 名を対象に行った。生活習慣病、二次障害および現在の生活スタイルについて「運動している群(以下、E 群)」と「運動していない群(以下、C 群)」に分類し、評価、検討した。

【結果】

損傷部位では、頸髄損傷が E 群で有意に高かった ($p < 0.01$)。麻痺の程度は、完全・不全麻痺が E 群で高かった ($p < 0.01$)。健康状態では、「生活習慣病である」が C 群で有意に高かった ($p < 0.01$)。更に詳細に見ると、C 群では「高脂血症」が有意に高く ($p < 0.05$)、喫煙状況も C 群では有意に高かった ($p < 0.01$)。食事に対する項目では、E 群で「栄養バランス」が有意に高かった ($p < 0.01$)。障害を起因する疾病では、「疼痛」($p < 0.01$)、「起立性低血圧」が E 群で有意に高かった ($p < 0.01$)。E 群の運動実施の目的では「リハビリテーション」29%と最も多かった。また、「運動強度を気にしているか」という項目では、37%が「気にしていない」と回答した。

【考察】

脊髄損傷者は、麻痺によって活動量の低下から生活習慣病の発症が高いと言われており、本研究でも C 群に生活習慣病が有意に高かった。中でも、「高脂血症」が有意であり、さらに運動していない生活スタイルが生活習慣病危険因子を助長させることが考えられた。一方、E 群で「リハビリテーション」を主目的とした運動強度に配慮しない運動への長時間の取り組みが、「疼痛」を増強させていることも懸念できない。しかし、明らかに運動を行わない不規則な生活スタイルが、高脂血症に由来する生活習慣病の発症を助長させる。

脊髄損傷者が健康であるには、健常者と同様に運動・栄養・休養のバランスが必要である。

慢性期脊髄損傷者の心の健康とその関連要因について

RS 学科 15 期 4 番 内藤 舞

【はじめに】

病院を退院し、永年、日常生活を営む慢性期脊髄損傷者（以下、脊損者）の心の健康については、従来から問題視されながら、不明な点が多い。そこで、本研究では、脊損者が永続的に健康的な心の状態を維持するには、日常生活のどのような因子が影響し得るかを明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象は、A センター病院を退院し、10 年以上、日常生活を営んでいる脊損者 45 例（男性 33 例、女性 7 例、性別未記入 5 例、受傷後経過平均 23.9 ± 4.2 年）であった。方法は、2 種類の質問紙（健康状況調査と心の健康調査：MQS）を用いて、健康的な生活を営む上でのポジティブな要因およびネガティブな要因に分類し、解析した。

【結果】

ポジティブな要因は、「疼痛がある」、「排尿管理において介助を受けている」、「運動している」、「外食をすることがある」であった。一方、ネガティブな要因は、「受傷部位が L1 以下である」、「肥満である」、「痛みやしびれがある」、「親と暮らしている」、「日中排尿回数が 10 回以上である」であった。

運動することが心の健康の向上に関連している要因は、「疼痛がある」、「日中排尿回数が 6 回以上または 7 回以上である」であった。また、運動しないことが人の心の健康の低下に関連している要因は、「肥満である」、「一人で暮らしている」であった。

【考察】

永続的に日常生活を営む脊損者の心の健康に大きく作用する因子は、運動実施の有無、良好な排泄コントロール、生活形態や周囲のサポートなどの社会性が関連し合っていることが明らかとなった。しかし、脊損者の心の健康に関連する要因は、不明確なことが多い。今後、より適切な支援策を検討していくためにも、疼痛と運動の詳細な関係や、性差などの因子との関連性について、さらに研究を深めていく必要があると考えられる

（４）定期総会

平成 18 年度リハビリテーション体育同窓会定期総会議事録

日時：平成 19 年 3 月 3 日（土）

場所：国立身体障害者リハビリテーションセンター学院 6 階中会議室

（司会）5 期：長木 （議長）13 期：内池 （書記）7 期：鹿島

正会員 118 名 出席者 27 名 委任状 44 通

1 号議案

【平成 18 年度実施事業報告】

RS ネット（ホームページ）の運用に関して、掲示板が荒らされている。今のところ対策は出来ていないが、ネットのアドレスを変更するなど対処していきたい

2 号議案

【平成 18 年度収支決算報告】

18 年度の決算報告で、予備費が多いとの指摘あり

この予備費やりハゲーム集の売り上げを、卒論等の研究助成金として使わせてもらえないか？

昨年度から職リハも無くなり、RS としての収入がなくなった。また会費滞納者もいる事から、今後助成金として継続させるのは困難（実際は収入、支出はプラマイゼロ）

3 号議案

【新会員の紹介】

平成 18 年度リハ体育学科卒業生 4 名を新会員として承認した

4 号議案

【平成 19 年度同窓会役員・部員の選出】

5 号議案

【平成 19 年度収支予算案】

1．デジタルビデオカメラの購入について

毎回学院から借りており、理事会でも過半数が承認している 購入する方向で検討

6 号議案

【平成 19 年度実施事業計画案】

RS ネット運用（リニューアルの件）について

項目を変える等シンプルなものにしたい。費用は 4 万円程度かかりそう

掲示板も荒らされていることから、アドレスを変える等の対策が必要

来年度はビデオカメラの購入予定もあり、優先順位をつけどちらか一つを実行する

理事会で話し合い決定

7 号議案

【検討事項】

1．今後の指針仮案について（齊藤新会長より）

2．その他

外部講師による講演依頼の件（国立ケルンスポーツ大学のクラウドシューレ教授を呼び、ドイツ国内でのスポーツセラピーの現状等を話していただけないかと会員から要望があった件）

理事会で検討

2. 会員近況報告

○ 6期生

氏名 : 竹村 亮子(旧姓:西村)

勤務先 : フリー (NPO法人や受託会社を通じて)

職名 : 運動指導員、インストラクターなど

対象者 : 主に特定高齢者、一般高齢者など

勤務内容 : 介護予防教室や転倒予防教室、筋力アップ教室など、各自治体から依頼を受けた教室の運動部門を担当。保健センターや地域の公民館などで実施。チェアピクスやチューブトレーニングなど座位中心の低強度のものから、立位やマットを使った中程度の内容が中心。メタボリック解消教室などで、トレーニングジム内でのマシンを使った内容もたまにある。

近況報告 : 平成 17 年に三つ子(♂ ♀ ♀)が生まれ生活が一変しました。2 歳を過ぎた今はずいぶん気分的に楽になりましたが、これまでやったどんなトレーニングよりハードで、冗談抜きで、壮絶な 1 年でした!! 生後 5 ヶ月から保育園に行っていますが、病気で休むリスクも 3 倍ですし、フルタイムで働くのは当分無理と考え、1 年ほど前からフリーで仕事をさせてもらっています。

毎日、北九州近辺の市町村へ出向き、依頼を受けた内容で指導をしています。3 ヶ月が 1 クールで前後に評価測定がある教室が多いです。運動指導員 1 名に対し 10~15 名の参加者で、教室や人数によっては 2 名で担当しています。ハイリスクな高齢者も多く、保健師さん、看護師さん、栄養士さん、歯科衛生士さんらと情報交換しながら実施するため、私自身、とても学ぶことが多いです。

また、職域を変えたことで、家庭をもって働く同世代や先輩方に多く出会い、今後目標となる姿を目にする機会が増えました。どんな職種でも、仕事をしていなくても、学生時代に学んだことが無になるとは思いませんが、世の中に必要とされる職種、人材であり続けるためには、それなりの努力が必要だと感じています。しかし、今は個人的に使える時間が限られているので、その中でできることをやるのみです。この仕事が好きなので、どうにかつながっていたいと思っていますが、、、

おばちゃんイントラの仕事が増えるよう 1 本 1 本がんばります!

○ 15期生

氏名 : 秋山 太郎

勤務先 : (株)キノシタライフ リアンレーヴ高田馬場(有料老人ホーム)

職名 : ケアワーカー

対象者 : 高齢者 (要支援 1~要介護 5) 現在 47 名(満床 120 程度)

勤務内容 : 排泄、整容、入浴、食事介助、経管栄養、入退居準備、
洗濯、リネン交換、掃除、レクリエーション、イベントの企画・実行など
利用者の生活に関わるもの全般に対する介助と支援
月に 5~7 回の夜間勤務あり

近況報告 : リアンレーヴはキノシタグループという建設・不動産会社傘下のキノシタライフが運営して

いる有料老人ホームです。私が入社して1年、リアンレーヴ高田馬場がオープンして2年程度が経ちますが、施設として未だ固まっていない部分が多く、試行錯誤しながら少しずつ前に進んでいるといった状況です。

また介護業界全体をみても同様でしょうが、当施設でも常に職員の不足状態で、入居者と家族のニーズに十分に応えられていないというのが現状です。私も「レクリエーションやリハビリを充実させていって欲しい」ということで入社したのですが、実際現場ではそういった部分に人員をさけない状態で、現在は介護が仕事の中心となっており、理想と現実の乖離に悩まされています。

入居者の身体活動に関しては、以前は午前中に録画DVDによるテレビ体操が行われているのみでした。しかし対象に対し難易度が高すぎ、また指導者もいないため評判は悪く、参加率も低かったのですが、対象者に適した体操プログラムを考案し実践したところ、徐々に参加者も増えてきました。また午後はレクリエーションが行われていませんでしたが、曜日ごとにサークルをつくり定着させていきました。私は太極拳のクラスを開き、現在は基本の八段錦というものに取り組んでいます。

このような部分から手をつけていかねばならない程、施設としてはまだまだ未成熟であり、悪戦苦闘の毎日ではありますが、それ故に何も無いところからRSというものを定着させ、発展させていっている諸先輩方の苦勞とご尽力が身につまされる思いです。

また当施設ではこれまで食事などを1フロアに入居者を集めて対応しておりましたが、入居者の増加に伴い各フロアごとのサービス提供へ移行していかなければならない段階となり、私もフロアリーダーに抜擢されました。自分の仕事が認められたことが嬉しい反面、「リハビリテーション体育士としての職の確立」という当初の目的からそれているようで、不安に苛まれることもあります。できることから手をつけ、入居者の健康の維持・増進、介護予防に働きかけていきたいと思っております。

氏名：井藤 知世

勤務先：国立身体障害者リハビリテーションセンター 病院

職名：運動療法助手

対象者：当センター病院に入院されている方、及び外来で通院されている方

更生訓練所の就労移行支援および自立生活訓練課程を利用されている方

主な勤務内容：

病院入院患者のリハビリ体育

月・水・金 9:00～12:00

病院外来患者のリハビリ体育

個々のスケジュールにあわせて曜日・時間を設定

週1～3日 1日につき45分～

更生訓練所利用者のリハビリ体育支援

固定クラス 8クラス

選択クラス 5クラス

第三体育館開放時の監視・指導

月・火・木・金 15:30～17:00

健康教室

月に1回病院の外来で行なわれる健康教室でのストレッチ

近況報告: 今年の3月末までの勤務となるため、昨年の11月から特別支援学校で時間講師を週1日(12月までは2日)しています。

この1年は、学院で学んだことを生かしながら、さらに理解を深めることができた1年間でした。そして、国リハがモデル事業として行ってきた高次脳機能障害の方への対応など、まだまだ勉強不足な面が多々あります。その中でも、入院から退院さらには外来や更生訓練所へと移行し、国リハでのリハビリテーションを終えるまでの現場で、リハ体育という場面を通して携わる中で、当たり前のことになりますが「人が変わっていく」ということを実感しています。

氏名 : 内藤 舞

勤務先 : 群馬県医師会 沢渡温泉病院

所属 : リハビリテーション部 理学療法室(医療体育 担当)

対象 : 脳血管障害、変形性関節症(股関節、膝関節)、腰痛症、骨折、脊髄損傷 など

勤務内容: 集団での体操、スポーツ・レクリエーション、水中運動を通して、体力の維持・向上や精神活力の回復を図り、活動性の向上につなげていくための支援をしています。

近況報告: 学院を卒業後、千葉リハビリテーションセンター更生園に嘱託職員として就職し、半年間、リハビリテーション体育プログラムを担当させていただきました。その後、去年11月に沢渡温泉病院へ正規職員として就職し、約3ヶ月が経ったところです。

少しずつではありますが、業務の流れにも慣れ、一人で行えることも増えてきました。同じ部署には8期の齊藤健夫さんがおり、様々な面でアドバイスをいただきながら、日々の業務に取り組んでいます。

これからも学院で学んだことを活かし、また日々の学びを積み重ねていくことで、沢渡温泉病院で自分が出来ることを精一杯やっていきたいと思っています。

プログラムの実際:



体操プログラム



水中プログラム

3. 学院紹介
(1) 16期生紹介

	出身	出身大学	外部実習場所	卒業論文テーマ
岩切 三千代	埼玉	日本体育大学	社会福祉法人 太陽の家別府本部 心身障害児総合医療療育センター	我が国のリハビリテーション 体育発展の為の一考察
大口 友希	千葉	日本体育大学	埼玉県総合リハビリテーションセンター 東京都障害者総合スポーツセンター	ウィルチェアラグビーにおける 傷害理解と予防策の検討
金子 雅彦	滋賀	中京大学	名古屋市障害者スポーツセンター 滋賀県立障害者福祉センター	野球のゴロ捕球練習が関節可 動域・バランス能力・歩行動作 へ及ぼす効果 ～脳性麻痺者に対する指導の 一事例～
許 宗秀	大阪	愛知教育大学	医療法人東京愛成会 高月病院 東京都多摩障害者スポーツセンター	脊髄損傷者の心の健康とその 関連要因について
駒沢 篤	福岡	福岡大学	熊本機能病院併設 熊本健康・体力づ くりセンター 財団法人 福岡県地域福祉財団	脊髄損傷者の生活習慣病に対 する運動の効果
鈴木 真生子	東京	日本大学	鹿教湯三才山リハビリテーションセン ター三才山病院 国立別府重度障害者センター	発展途上国におけるリハビリ テーション体育の意義と今後 の普及への役割の検討 ～タイ・マレーシア・ラオスの車い すバスケットボールからの一考察～
西岡 輝	東京	日本体育大学	国立福岡視力障害センター 埼玉県総合リハビリテーションセン ター	老人保健施設における高齢者 の身体活動の現状と課題
肥田野 篤史	新潟	仙台大学	国立伊東重度障害者センター 新潟県障害者交流センター	車椅子使用者のMETを用いた運 動指標について
福田 直美	広島	国士舘大学	国立別府重度障害者センター 国立身体障害者リハビリテーション センター更生訓練所	競技用車椅子駆動の動作筋電 図特性

(2) 17 期生紹介

~ RS17 期生の他己紹介 ~

大屋 友紀子 (おおや ゆきこ)

佐賀生まれの佐賀育ちの 25 歳。RS17 期のトラブルメーカー。授業中に意識を失い担架で運ばれる。先生と白熱した意見交換をも行う。授業中に居眠りをしていると思いきや眠りから覚めると急にキラパスともいうべき難しい質問を先生に投げかけるなどの荒業連発してきた。by てら

寺本 朋弘 (てらもと ともひろ)

九州男児 (熊本出身) とはこの子のことです!!
きっと将来は亭主閑白になることでしょう!!
なみに、1984 年 10 月 24 日生まれのおさそ

り座の男です。学校では、2 人のカワイイ同級生に囲まれながら日々精進しています。スポーツ歴は空手!意見と男らしい一面があったり…。梅崎先生からは毎日のようにいじられています。それを見て楽しんでいる廣田と大屋です^-^ by Maki

廣田 真紀 (ひろた まき)

1983 年生まれ、牡羊座、AB 型、かわいらしい女性。モーニングメイトやっています! 責任感が強く、辛抱強い人。真面目で、心配性。工作、絵画がうまい!! 筋骨格系に強く、体育の指導に関して熱い一面も。性格的には、天然な男前?!(→ 16 期大口談) by YUKKO

森久保 和子 (もりくぼ かずこ)

“RS の母” 的存在、“日本の母” と言っても過言ではない! 還暦目前とは思えないくらいの動きを見せ、活動的である。趣味はネコのグッズを収集し、家でもコモとミーの 2 匹のネコを飼っている♪チャーミングで、乙女な一面を見せる人! RS17 期生の頑張り屋さんである。by YUKKO & Maki



4. 会員研究報告

障害者スポーツ施設利用者および大会参加者における スポーツ実施状況とその関連要因について（１） ～身体障害の場合～

○本田 春彦¹、植木 章三¹、岩岡 研典²、飛松 好子³、
江端 真伍¹、岡田 徹¹、石川 千聖¹

¹東北文化学園大学医療福祉学部 ²富山大学大学院医学薬学研究部

³広島大学大学院保健学研究科

【目的】

障害者の健康増進と QOL の向上に障害者スポーツの果たす役割は大きく、余暇の活動の充実や自立生活の確立に有効であると考えられているが、今後のスポーツ活動の更なる有効活用法を検討していくためには、障害者のスポーツおよび余暇活動の実態についての知見の蓄積が必要である。そこで本研究は、スポーツ施設利用者およびスポーツ大会の参加者を対象に、スポーツや余暇活動の実施状況とそれに関連する要因について明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】

対象は日本障害者スポーツ協会関係施設の利用者およびフェスピック等のスポーツ大会の参加者 720 名である。回答数は、488 名（男性 62.7%、女性 37.3%）、回収率は 67.8%であった。使用する変数は性、年齢、などの基本属性、健康状態、ADL や移動能力、社会参加の状況、運動・スポーツの実施状況などである。スポーツ施設の利用に影響を及ぼす要因を検討するためにスポーツ施設利用頻度（週 1 回以上 / 週 1 回未満）を従属変数とし、単変量解析で相関のあった諸変数を独立変数とした強制投入法による多重ロジスティック回帰分析を行った（有意水準 10%）。

【結果と考察】

身体障害者におけるスポーツ施設の利用と有意な関連要因は、年齢が高いこと（オッズ比 1.02）、持病の無いこと（オッズ比 2.93）、日常生活の介助が無いこと（オッズ比 1.92）、スポーツ施設での交流があること（オッズ比 2.29）、健康関連 QOL 指標の下位尺度である身体機能得点の高いこと（オッズ比 2.06）であった。このことから、身体障害の場合、身体的要因がスポーツ活動の頻度を左右している可能性が高く、今後は ADL や移動能力等の身体機能の低い障害者に対するスポーツや余暇の活動支援をより充実させていく必要性が示唆された。また、スポーツ活動と他者との交流との関連が見られたことから、障害者はスポーツ活動によりコミュニケーションの機会を獲得していることが示唆された。

なお、本研究は平成 18 年度障害者自立支援調査研究プロジェクト「障害者の健康維持と QOL を促進するためのスポーツ・余暇活動の分析及び有効活用」（財団法人日本障害者スポーツ協会科学委員会）の一部として行われたものである。

（この原稿は第 28 回医療体育研究会/第 11 回日本アダプテッド体育・スポーツ学会 第 9 回合同大会で発表された抄録を掲載させていただきました）

地域高齢者の生活習慣が生命予後に与える影響

- 運動習慣に焦点をあてて -

氏 名：伊藤澄雄¹⁾ 安梅勅江²⁾ 篠原亮次²⁾ 杉澤悠圭²⁾ 澤田優子³⁾

三輪真知子⁴⁾ 永井道子⁴⁾

1) 飛島村すこやかセンター 2) 筑波大学大学院人間総合科学研究科

3) 近畿大学病院 4) 浜松医科大学医学系研究科

．はじめに

日本は超高齢社会への道を歩みつつあり、2015 年には高齢者数が 3,300 万人に達することが予測されている（厚生労働省，2005）。それに伴い要介護老人の増加による介護保険制度の安定した見通しが危惧されている。2006 年より自治体に設置された地域包括支援センターにおいても、地域支援事業（包括的支援事業）介護予防支援事業の中で運動機能を向上させることによる介護予防が始まり、高齢者を対象にした運動実践支援・指導の役割はますます大きくなっている。本研究では、追跡調査の一部を再分析し、地域在住高齢者について、生活習慣の特に運動習慣に焦点をあて、生活習慣と 7 年後の死亡率との関連を明らかにすることを目的とした。

．研究方法

研究デザイン：演繹的量的研究

対象：中部地方の自治体 T 在住の 65 歳以上の高齢者 881 人のうち、基準年(1998 年)の調査で回答を得た中で、2005 年まで追跡可能な 669 人を今回の研究対象とした。

期間：基準年（1998 年）から 7 年後（2005 年）までとした。

方法：各地区の保健活動推進員による配票留置の記名自記式質問紙を用いた。原則として 本人による記入とし、記入不可能な場合、家族に聞き取りを依頼した。また聞き取りも不可能な場合は欠損とした。

調査項目：対象特性〔年齢、性、自覚症状、疾患の有無、介護の必要性、ADL（移動機能、感覚機能、身辺処理機能）〕、精神的な健康、社会関連性指標、日常生活動作、生活習慣(朝食摂取・間食・塩分摂取・栄養バランス・飲酒・喫煙・睡眠・運動習慣)等であった。

分析方法：基準年の対象特性と 7 年後の死亡との関連、生活習慣各項目と 7 年後までの死亡との関連について、 χ^2 検定で明らかにする。また、7 年後の生命予後について、2005 年までの死亡を目的変数、生活習慣の各項目を説明変数、対象特性を調整変数として、3 つの方法で多重ロジスティック回帰分析を実施する。1) 調整変数を投入せず、生活習慣各項目を一つずつ投入、2) 対象特性を調整変数とし、生活習慣各項目を説明変数として一つずつ投入、3) 対象特性の調整変数に加え、生活習慣全項目を調整変数として強制投入したものである。さらに、運動習慣と生活習慣各項目について、 χ^2 検定で有意差を算出する。いずれも 5%水準で有意差ありとする。分析には、PC 版 SAS 統計パッケージ Ver.8.2 を用いた。

倫理的配慮：対象者には研究の主旨と個人情報保護を文書で説明し、研究協力の同意を得た者に実施した。また、浜松医科大学医学研究倫理審査委員会の審査を受け承認を得た。特に個人情報保護のため氏名は匿名化し ID 番号による管理を行った。

．結果

7年間の死亡者は669人中139人(20.8%)であった。 χ^2 検定による対象特性と死亡の関連では、年齢($p<0.0001$)、介護の必要性($p<0.0001$)、移動機能($p<0.0001$)、感覚機能($p<0.0001$)、身辺処理機能($p<0.0001$)で有意差がみられた。生活習慣と7年後の生命予後との関連では、間食の習慣($p=0.045$)、栄養バランスの配慮($p=0.004$)、運動習慣($p<0.0001$)で有意差が見られた。生活習慣各項目の死亡に対するオッズ比(調整変数投入前)では、間食の習慣においてオッズ比は1.47(95%信頼区間1.01-2.13, $p=0.046$)で、5%水準で有意差が見られた。栄養バランスの配慮においてオッズ比は1.72(95%信頼区間1.18-2.51, $p=0.005$)で、1%水準で有意差が見られた。運動習慣においてオッズ比は3.44(95%信頼区間1.98-5.98, $p<0.0001$)であり、0.1%水準で有意差が見られた。

生活習慣各項目と死亡に対するオッズ比(調整変数投入後)では、すべての調整変数を投入した後も有意差が見られたのは、「運動習慣」のみであり、オッズ比は2.54(95%信頼区間1.38-4.69, $p=0.003$)であった。生活習慣及び対象特性と死亡との関連において、「年齢」(オッズ比1.12, 95%信頼区間1.09-1.16, $p<0.0001$)、「性別」(オッズ比2.75, 95%信頼区間1.70-4.45, $p<0.0001$)、「介護の必要性」(オッズ比2.46, 95%信頼区間1.21-5.02, $p=0.013$)、「移動機能」(オッズ比2.27, 95%信頼区間1.36-3.79, $p=0.002$)で有意差があり、生活習慣の項目の中では「運動習慣」(オッズ比2.49, 95%信頼区間1.32-4.67, $p=0.0046$)のみで有意な関連が見られた。運動習慣と生活習慣との関連において、朝食の摂取($p=0.0006$)、間食の習慣($p=0.009$)、塩分摂取の配慮($p<0.0001$)、栄養バランスの配慮($p<0.0001$)で有意差が見られた。喫煙習慣($p=0.033$)、十分な睡眠($p=0.011$)でも有意差が見られた。

．考察

本研究において、地域高齢者の生活習慣と7年後の生命予後に影響する要因を明らかにするため、生活習慣の特に運動習慣に焦点をあて、追跡調査を行った。その結果、望ましい生活習慣、特に高齢期も運動習慣を持つことの重要性が示された。これは、藤田ら(1990)や、中野ら(2006)をはじめとする既存研究成果とも一致するものであった。本研究の結果から明らかになったことは以下の3点に集約できる。生活習慣各項目の中で、運動習慣が生命予後と一番強い関連を示した。このことは、健康でアクティブな高齢者が即ち運動習慣を持つとも考えられるが、日常生活の中で運動習慣を持続することが、ポジティブな思考や活動、期待を持つことに繋がり、自己効力感や健康長寿の重要なファクターであると思われる。運動習慣と栄養・食事に関する項目と強い関連を示した。このことは、運動と栄養は相互に作用しあうものであると考えられ、高齢者に対する健康行動の増加には多角的なアプローチの可能性が示唆された。運動習慣を自認している者は、運動の種類・頻度の如何によらず生命予後が良い。このことは、高齢者自身が身体活動・運動を意味ある行動として価値を見出し、健康でありたいという信念の基、身体活動・運動を実践していると考えられる。

今後も高齢化が進むことは周知の事実であり、既存研究成果から、社会背景を鑑み、地域に即した取り組み易い、運動習慣定着のためのシステムづくりが急務であるといえる。そこでは、エビデンスに基づいた、専門家の介入、運動の指導・支援をする専門的職員配置が期待される。本研究の結果は、高齢期の生命予後・健康寿命の延伸には運動習慣・身体活動量の維持・増進が重要であることを再現し、高齢期の運動習慣の定着に向けた、積極的な保健福祉支援システムづくりの重要性を示すものであった。

5. 第28回医療体育研究会 / 第11回日本アダプテッド体育・スポーツ学会 第9回合同大会 ワークショップ「障害のある人々スポーツプログラム」に関する報告

1. ワークショップの概要

1. 主 旨

RSのあり方を模索し、社会での市民権を得るための取り組みの一局面となるワークショップである。今回のこの機会が、今後の私たちの存在意義を深めていくきっかけなり、将来的にリハビリテーションスポーツセミナーとしての普及活動などにつながる実験的な場ととらえることが出来る。まずは一歩踏出すことを念頭に、今後のRSのあり方につながるようにしていければと考える。

2. 目 的

身体に活動制限があっても、障害のある人々がスポーツ自体を楽しむことができる関わり方について、障害の状況に合わせてルールや用いる道具を工夫していくことの必要性について体験を通して伝え、そのスポーツプログラムのあり方について伝えること。

3. スタッフ

梅崎多美(2期) 高橋春一(3期) 長木 希(5期) 安江徹太郎(6期) 鹿島 秀(7期) 岩淵典仁(8期) 齊藤健夫(8期) 石村祐輔(9期) 小林岳雄(13期)

4. 対象者

本学会参加者ならびに地元の障害者スポーツ指導員や福祉や医療を学ぶ学生など

5. 打ち合わせ概要

	日時	参加人数	概要
第1回目	5月26日	6名	ワークショップの方針・主旨の決定
第2回目	8月25日	3名	プログラムの大枠・方向性の決定
第3回目	10月13日	6名	プログラムの最終決定

6. プログラム内容

日時：平成19年11月24日(日) 10:00～11:30

場所：別府大学内 体育館

内容：1) セミナー挨拶

目 的：スタッフと参加者との顔合わせ及び活動を開始する動機づけ。

実施内容：ワークショップ開始の挨拶とスタッフ・同窓会の説明を行う。

留 意 点：立位置は、**図1**を参照のこと。

2) ワークショップの主旨

目 的：ワークショップの主旨を伝え、理解を深めること。

実施内容：ワークショップの概要について口頭で伝える。

留 意 点：立位置は、**図1**を参照のこと。

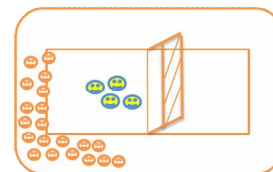


図1. あいさつ・主旨説明レイアウト

3) 本編（実技体験）

* バレーボール

目的：バレーボールを題材にし、“車いす乗車する”“座って行なう”などの条件設定を施し、障害の状況に合わせてルールや用いる道具を工夫していくことの必要性について伝えること。

実施内容： A. 通常のバレーボール
B. 車いすに乗車しての工夫
C. 座って行なう工夫

4) 整理（アンケートの記入）

目的：今後、ワークショップを少しずつ充実させ、障害のある人々への体育・スポーツの必要性について、伝えていけるように、試行錯誤していく上での、情報収集を行うこと。

5) まとめ / 閉会の挨拶

目的：ワークショップ全体の総括と今後について伝えること。

留意点：会場のレイアウトは、**図2**を参照のこと。

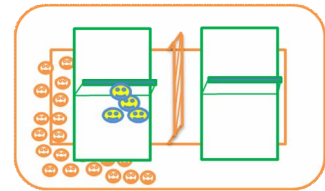


図2.まとめ/閉会の挨拶レイアウト

・ワークショップ実施後の結果

1. アンケート調査の結果（1部抜粋）

1) 経験者

- ・実際に障害のある人に対する工夫ではなかったが、具体的ではないけれど、考え方は様々な場面で活用できる。
- ・学会参加者や障害者スポーツ指導経験者が受講していることを考慮すると、もう少し高度な内容でも良いと思います。新しい発見につながる講習会だともっと良いです。
- ・受講生が考えていく形で良かった。

2) 未経験者

- ・参加型だったので、自分が実際に行ってみてその難しさや、また他の人を客観的にみること、どのように工夫をしていけば良いかの考えることができたと思う。
- ・障害者が楽しめるように、ルールなど試行錯誤して取り組むことの大切さを学びました。何事も創意工夫が大切だと思った。
- ・実技をしながら意見と取り入れて、良い方向へ改善するように展開していったので、わかり易かった。実際に自分でも体験できて、理解が深まった。

2. スタッフからの意見（1部抜粋）

1) 感想

- ・服装が伝達されていなかったため、ダイナミックな動きができないことが、全体に影響してしまったように思います。しかし、こちらの意図を少しは理解してもらえたような印象があ

ります。やはり、今回の内容は、学生、素人の方を対象として内容であったと感じます。そのため、学会会員の方に向けた内容も今後検討していくべきであろうと思います。

- ・大変良かったと思います。服装などについて伝達できていませんでしたが、事故もなく参加者も楽しんでいたのではないかと思います。
- ・思ったよりも参加者が積極的であった。

最初是指導者の促しにより意見を述べていた感もあったが、後半は仲間同士意見を出し合いながらプレーしていた。また座位では自分たちなりに工夫し、特に女子はスカートだったため、足にタオル等巻いて行っていた。その為か、次第にアクティブにプレーする姿がみられた。

2) 今後に向けての改善点

- ・どのようなレベルの方に対してのセミナーなのかははっきりしないと、参加者のニーズに答えることは難しいと思います。
 - ・今回は用具・コートなどの工夫などでしたが、「よりゲーム展開に楽しくする工夫」、「なかなか触れることができない、打ち返すことが難しい方に対しての工夫」などとして、ルールや条件なども考えてもらうような内容も面白いと思います。例えば、多くの方が触れるようにする工夫として、1回では返せない、○回目で返す、全員が触ってから返すなど
 - ・今回は対象者のメインを看護学生におき、プログラムを作成したが、今後学識者などを対象とした際はもう少しレベルの高いものが要求される。参加者に合わせたプログラムが提供できればと思う。
 - ・車椅子と座位の2パターンで行ったが、両方とも工夫の仕方が同じであった。それぞれで違う工夫を提供できればと思う。
 - ・当日の話し合いの時間を、もう少し確保する必要がある。
 - ・前半、実技に参加している対象者は課題について考えていましたが、参加していなく周囲で見学していた参加者の大半が私語をしていました。見学者にも課題への取り組みを促し、改善点をマイクを向けるなどして聞き取れると良かったと思います。
- 後半は対象者全員が実技に参加し課題について考えていた様子が見られました。その点は良かったと思います。

・当日のセミナー風景



ドキドキの一瞬（ワークショップ開始の挨拶）



うまく動けない！（車いすでのバレーボール）



ネットが弛んでる（座ってのバレーボール）



出来るかなあ？！（創作バレーボールを体験）



どうだったかなあ？！（アンケートの記入）



お疲れ様です（閉めの挨拶）

発行：平成 20 年 3 月 12 日発行

＊編集後記＊

会報 22 号が完成しました。第 14 回同窓会報告・を掲載した 22 号ですが第 15 回同窓会が開催される時期の発行になってしまいました・・・。次号は都合により同窓会に参加することができない方にも会の様子をできるだけ早くお伝えできるよう、早めの発行を目指してがんばります！

今号の編集を機に、私のノートパソコンをワード 2007 へ進化させました。まだまだ不慣れですが、この会報誌がみなさまの情報交換や交流の場になりますように、このパソコンとともに努力していきたいと思います。

会報 22 号 作成協力者；齊藤健夫 梅崎多美 安江徹太郎

今回の会報作成にあたり、上記各氏に協力いただきました。また、原稿を送っていただきました会員のみなさま、ありがとうございました。

発行所 ： 〒359 - 0042

埼玉県所沢市並木 4 - 1 国立身体障害者リハビリテーションセンター学院
リハビリテーション体育学科内

編 集 ： 長木 希

発行責任者： 齊藤 健夫